

東日本大震災と臨床教育学の課題—7年半の現地訪問・聴きとり調査から

- 田中孝彦
- 上田孝俊（武庫川女子大学）
- 筒井潤子（都留文科大学）

1. 7年半の日本臨床教育学会「震災調査グループ」の研究活動と子ども・若者の「声」

この間、私たちは、みやぎ教育文化研究センターと共同して、東日本大震災後の宮城県のいくつかの地域で、①人々と子ども・若者の被災の状況、②生活の再建と「復興」の動向、③教師の生き方と教育実践の模索、④子ども・若者の人生選択の模索を軸として、現地訪問・聴きとり調査を続けてきた。これまでの訪問・聴き取り調査の記録は、その都度、『資料集』として残してきたが、この「調査グループ」としては、それらをもとにして、遅くないうちに、この継続的調査の一つの区切りとして、『報告書』をまとめたいと考えている。

私は、この調査グループの一員として、主に、震災に遭遇した子ども・若者たちに、被災の体験と、その後の生き方の模索についての聴き取りをしてきた。今回の報告では、そのうちの何人かの語りを紹介し、そうした子ども・若者の「声」が、おとな・教師に及ぼしてきた影響を考えてみたい。また、そうした子どもたちの声が提出している教育実践と教育研究にとっての問題・課題の整理を試みてみたい。

なお、作家の吉村昭は、記録文学としてよく知られる『三陸海岸大津波』（1970）において、とくに1933年の津波の記録の部分で、当時の生活綴方に表現された子どもたちの「声」を資料として重視している。私たちは、「東日本大震災」を経験した子ども・若者の声を聴き続けてきたわけであり、私自身の問題意識・方法意識を明確にするために、この作品で吉村が子どもの声を重視した意味をあわせて検討してみたい。

2. 学校・教師に問われたこと ～自己存在の揺るぎとその自覚～

自然災害が人間に与える非日常的生活（困難な生活）時間は、数年あるいは数十年で表面上は消えていくものであろう。同時に、震災という「非日常的空間」のなかで「自己」を揺さぶられ、また他者理解の困難性、総じて教育とは何かを問い直した学校・教師が、「日常化」のなかでの追求を見失っている、あるいは問われないように仕向けられているという印象を大きくした。

被災時に子どもの不安を察知し行動する教師が子どもたちの絶対的安心に関わる存在であったこと、しかしながらその教師たちも、内面では生き残ったことの偶然と責任に脅え「何とかしようともがくのだが、何もうまくいかない」と苦しんでいたこと。この教師と「自己」の存在の両義性と揺るぎ、あるいはその自覚が、子どもたちや被災者への共感や彼らを主体とする応答的实践に繋がっていたことを強く感じた。そして、臨床教育学が援助職・教育職の専門性としてとらえてきた他領域の専門家と協働する「開かれた専門性」に加え、教師自身の「自己」との応答・対話、すなわち「自己を開く専門性」（「援助職の自己ケア」ともいうべき側面も含め）が必要と

されるのではないかと考えた。そして「日常化」のなかでは、「自己を開く専門性」が逆に脆弱になり、その結果、共感的・応答的实践が欠落しているのではないかと考えられる。

この間、聴きとりや実践をともに追った教師たちの事例に報告する。

3. 被災と「復興」による傷つきのあり様を考える ～ある母親の語りから～

被災による傷つきと同時に、この7年間の「復興」に伴う複雑な思いや傷つきについて考察する。そこから読みとれることは、現代社会の一見「平穩」な日常における、目には見えにくい人々の傷つきとその援助の本質につながっているのではないかと考えている。当日は、同行した幾度かの被災地訪問調査において、臨床心理士の立場から感じ取った様々な感覚と、被災後を生き抜いた一人の母親の語りの検討を通して報告する。

被災者は、現実の「復興」が進むほどに、想定していた未来はないということ突きつけられる。あり続けるはずだった風景。夢に見ていた生活。変化しながらも安定した自己像。そういったものが奪われる体験にさらされる。それに伴う微妙な内面でのずれや違和感は、他者に伝えるすべがなく、ときに誤解さえされるという外（支援者や被災地外の人々など）とのずれも生じさせる。それらはささいなものに見えても、日常的に幾重にもそのような体験にさらされる被災者にとって、大きな出来事によるトラウマとはまた違う傷つきになって、その生活に影響を与えているのではないだろう。傷は意識することによって回復に向かう。このような一見ささいな傷の蓄積も同様ではないだろうか。この調査を通して感じ取られた人々の傷つきのあり様に関する考察は、日常的な援助においても共通して配慮すべきこと、援助者が自ら戒めておくべきことなどを再認識させてくれるように思われる。